

なぜ今の若者は声を上げ、行動し始めたのか

小林 郁子

【学生レポート3】

なぜ今の若者は声を上げ、行動し始めたのか

長崎大学多文化社会学部 4年 小林 郁子

私たち長崎大学学生団体 STARs は、長崎県を拠点としながら、主に難民問題の認知啓発活動を行っており、2021年4月には WILL 2 LIVE 映画上映会を開催した。私は STARs の副代表として団体の運営を行うとともに、映画上映会に向けて広報の役割を担った。そうした活動をする中で、近年 STARs など社会問題や国際問題に取り組もうとする学生団体、若者を含む団体にて若者がこれまで以上に熱心に活動を行う原因は何であるか疑問に感じた。

そこで本稿ではその原因を探るべく、私の経験と考えを、具体的に「社会問題への関心と取り組みの要因」と「難民問題の解決に向けて活動する要因」の2つに分けてまとめている。

1. 社会問題への関心と取り組みの要因

私は、社会問題に関心を持ち、その解決に向けて取り組む若者が近年顕著になってきていると考えている。例えば、2021年4月15日の朝日新聞に「外国人労働者や難民問題に取り組む NPO 法人「POSSE」の学生ボランティアらが14日、政府が国会に提出した出入国管理法改正案に反対する4万348筆分の署名簿を法務省出入国在留管理庁（入管庁）の担当者に国会内で手渡した」とあり、若者の活動で社会に影響を与えた事例がある。では、なぜ関心の高い若者が顕著になってきているのだろうか。

1点目に、私たちがデジタル世代であることが関係していると思う。我々は2000年前後に生まれた世代であり、生まれた頃には既に携帯電話が普及していた。社会のデジタル化とともに成長してきた現在（2021年現在）の学生は、いわゆるデジタルネイティブの人がほとんどであると考えられる。昨今ではそうした世代が「Z世代」とも呼ばれ、生活にインターネットやSNSは欠かせない人が多いと認識されている。そのようなネット社会で育ち、インターネット上でありとあらゆる情報を普段から目にする私たちは、日本国内の

情報にとどまらず、世界の社会情勢や政治、人々の暮らしを簡単に目にすることができる。このような状況下で、私は、世界各地で起きている紛争や災害、日本国内の少子化問題や就職難といった不安や恐怖を感じさせるニュース番組や記事に触れている。一つ一つのニュースが即時にメディア等によって大々的に取り上げられ、衝撃的な映像や画像として日夜私のもとに届く。そのため、私は、世界中の負の側面を引切り無しに目にし、不安定な社会で生きている感覚を持っている。さらに、STARsのメンバーたちと話しているときに、このような感覚を彼（女）たちも持っていることを知った。この自分たちの将来や世界の状況に対する不安と恐怖から、私たちのような若者は、自らの発信し連帯する力を活かし、どうにか自らの手で社会を良い方向に向かせることは出来ないだろうかと考えるのではなからうか。

2点目に、私たちが受けてきたグローバル教育も大きく影響していると考えられる。情報社会の発展に伴い、世界全体が飛躍的にグローバル化したため、小学校では外国語学習の時間が設置された¹。また私の経験では、中学高校では英語のみならず世界について学ぶ時間や機会があり、大学においても国際的に活躍できる人材の育成に注力する傾向にあると思う。長崎大学においても「グローバル人材育成プログラム」²や「大学の世界展開力強化事業」³といった事業を実施している。したがって私はこれまでの経験から、学校はもとより国から「グローバル人材」として成長できるように教育を受けてきたように感じる。そうした中で、世界の情勢や社会問題が自らの学びと直結していることが多く、世界の状況を身近に感じやすいと思えた。それゆえ現在の若者がこれまでに受けてきた教育や私たちが生活する日本社会を問題視する姿勢も持ちながら、多様な問題解決に向けて動き出しているのではなからうか。

3点目に、先に述べた「連帯する力」という面で、私たち世代がある意味「孤独な世代」であることを象徴しているようにも思われる。親世代から徐々に女性の社会進出が進み、それまでは家の中で家事や育児に奮闘していた母親が仕事に就き、家を空ける時間が増え、子どもと接する時間が大幅に減った⁴。さらに、インターネットの普及によりネット上で

¹ 2020年に新学習指導要領が段階的に開始され、小学校では教科として外国語が新設された。

² 大学コンソーシアム長崎事務局 2017「事業概要 | 長崎発グローバル人材育成プログラム (GP)」(<https://glocal.nagasaki-chiikiedc.jp/overview/>, 2021. 12. 5 閲覧)。

³ 長崎大学 2010「大学の世界展開力強化事業」(<https://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/campuslife/contribution/sekaitenkai/index.html>, 2021. 12. 5 閲覧)。

⁴ 内閣府男女共同参画局 2017『男女共同参画白書』内閣府。

の新たな人間関係ができる反面、対人関係という面では疎遠になっていく、そんな状況で「孤独感」を常に感じながら生きている人が多い世代のようにも思われる。実際にソーシャルメディア・パラドクス⁵に関する研究を行った河井（2014：44）によると、「ソーシャルメディアをよく閲覧することが孤独感を高くする可能性を示唆し、よく投稿することが友人関係満足度を低くする可能性を示唆するとともに孤独感を高くする」と指摘されており、情報化と孤独の関係性は否定できない。しかし、ネット上の関係構築がいくとも簡単に行えるようになり、私は、似たような問題意識を持つ者や同じ社会問題を問題視する者と「共感性」を高め、ネットを通じて連帯意識を高めている。ネットを起点とする入管法改正案反対運動により、冒頭で引用した新聞記事のように入管法の改正が廃止されたこともその一つと言える。

さらに新型コロナウイルス感染拡大により、2020年以降はネットを通じての「連帯」が随所で見受けられ、メディアでも大きく報道されるようになった。コロナと連帯に関しては、藪田（2020：8）が「コロナがもたらした分断は、感染症を避けるための身体的、生理的な分断であって、決して社会的存在としての人間の社会性そのものを解体するものではないということである。（中略）マスクの不足が知れ渡ると手づくりのマスクを作って国境を越えて送り合う動きも活発になった。分断されていても連帯し合うことは決して不可能ではない。」と述べている。

2. 難民問題の解決に向けて活動する要因

次に、STARsをはじめとし、数多くの団体がなぜ「難民問題」の問題解決に向けて取り組むのかという疑問についてまとめる。そもそも「難民問題」と聞くと、「日本に難民問題があるのか」「難民が日本に存在するのか」といった感想を持つ方が、入管法改正案反対運動が活発化する以前は多かったように思われる。

しかし、ここ数年で外国人労働者や技能実習生に対する不当な扱いが問題視されるようになり、メディアで頻繁に報じられるようになった。また、国際関係や外国語を学ぶ私は、そうした問題に講義の中で触れる機会があり、来日する外国人の問題を非常に身近に感じている。インターネットの普及により、国家間の軋轢や外国人に対する嫌悪感に基づく情

⁵ ソーシャルメディアの利用によって友人関係や精神的健康にネガティブな影響を及ぼすこと。

報に限らず、外国人が発信する日本についての情報や日本への旅行および移住を歓迎するような情報が手に入るようになったため、幼少期から外国に親しみを感じながら育ってきた私は、外国人はまさに私と同じ「人間」として捉えている。したがって、同じ社会で生きる外国人にとって暮らしにくい社会であることは、同時に私にとっても生きにくい社会になると考えている。また、「グローバル人材」としての成長を期待される教育を受けてきた中で、海外での経験や外国語の習得に力を入れてきた若者の中には、海外での挑戦を後押しされる反面、私たちの暮らしてきた日本社会があまりにも外国人を受け入れる体制を整えていないことに疑問を感じている人も存在し、STARsのメンバーもそうした疑問を胸に抱えて活動している。さらに、近年では様々な人権問題が世界中で問題視され、日本のメディアも国外の人権問題を大きく報じているが、いかんせん日本政府は国内の人権問題には目を逸らし続けているように感じる。海外や多様性について学んできた私は、外国人への処遇の改善やたびたび指摘されている入管施設での問題に対する解決の兆しが見えない状況に疑問と怒りさえも感じる。その一つがまさにSTARsが問題提起する「難民問題」であり、それは声を上げるべき問題の一片でしかない。他国における高い難民認定率や難民の社会進出に向けた支援の取り組みを見ると、一人の学生として、日本社会に蔓延るあらゆる問題や不正、社会や政治への不満、そして自らが担い手となる将来について若者たちが手を取り合いながら発信し声を上げなければいけないと強く感じる。

以上が私の経験や思いをもとに考察した、社会問題や国際問題の解決に向けた活動をする若者が顕著になってきている要因である。今後は引き続きこうした思いを胸に、さらなる連帯と活動の幅を広げていきたい。

【参考資料】

- 河井大介 2014「ソーシャルメディア・パラドクスーソーシャルメディア利用は友人関係を抑制し精神的健康を悪化させるか」『社会情報学 第3巻1号』p.31-46。
藪田碩哉 2020「コロナ禍が示唆する新しい生活と社会ー既存の枠組みからいかにして脱出するかー」『敬心・研究ジャーナル 第4巻2号』p. 1-13。